

フランスから日本を眺めて考えること

松村 茂祥 (ストラスブール大学)

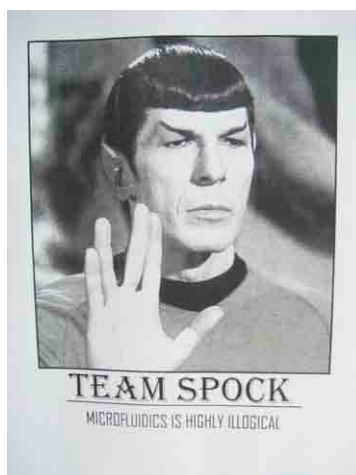
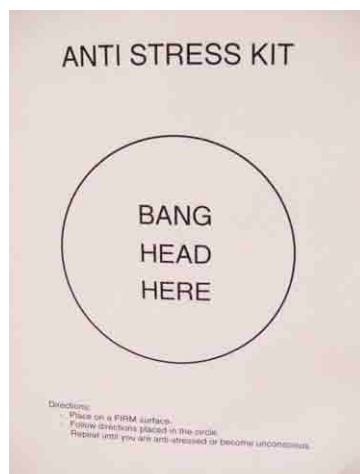
皆様、初めまして。フランス・ストラスブール大学でポスドクをしております、松村と申します。(会報の出版時には、パリへ移動していると思います。) 昨年 (2012年) のRNA学会の「RNAテクノロジー」のセッションで、全く応用とは関係のない場違いな発表をしていた者です。にもかかわらず、多くの方から好意的なご意見をいただき、大変恐縮しております。今回、編集幹事の中川さんより会報への寄稿の機会をいただきましたので、フランスでの研究生活や普段考えていることについて書いてみたいと思います。

フランスでのポスドク生活はすでに5年になります (そろそろ帰国したいのですが)。今回の帰国は約8ヶ月ぶりでした。最近はずっと学会等で帰国しているのですが、7月に帰国したのは初めてでした。やはり予想通り暑かったですね。フランスの夏は涼しいので、それに慣れてしまった身にはかなりこたえました。あと、フランスの夏のいいところは、私の大嫌いな蚊とゴキブリがいないことです。

ラボについて

所属しているラボはストラスブール大学ISIS (超分子科学工学研究所) 内にあり、マイクロ流路技術 (microfluidics) を用いて、基礎から応用までの生物学研究を行っています。主には、タンパク質の試験管内進化やドラッグスクリーニングの系の構築、といったところです。RNAを中心にやっている人間は実は少なく、私を含めて数人のみです。

ラボの規模は、原稿執筆時点ではパリへの移動の直前のため人数が減ってしまっていますが、それまではコンスタントに20人以上、多いときは30人以上いました。構成員はボス以外に秘書、リサーチアソシエイト (日本の助教のようなもの)、エンジニア、ポスドク、学生、となっています。研究分野が極めて学際領域のため、メンバーの専門分野は、



ラボ内の張り紙。「BANG HEAD HERE」(左)、「Microfluidics is highly illogical」(右)。ラボ生活でストレスが溜まるのは世界共通のようで…。

物理、工学、化学、生物と非常に多様です。

国籍も非常に多様で、一時期は15カ国以上からの人間がいました。例えば、フランス、ドイツ、イギリス、スペイン、オランダ、ベルギー、ルクセンブルク、リトアニア、スイス、トルコ、レバノン、チュニジア、イラン、モルドバ、インドネシア、アメリカ、そして日本、といったところでしょうか。多国籍とは言うもののヨーロッパがほとんどで、現在アジア人は私とインドネシア人のポスドクの2人だけ、あと過去にマレーシア人のポスドクがいたのみです。中国人とインド人がいないラボというのは、比較的珍しいかもしれませんが。ボスがイギリス人であることもあり、ラボの公用語は英語ですが、フランス人あるいはフランス語ができる人同士は当然フランス語で話すため、英語は上達しにくい環境だと言えるかもしれません（環境のせいにしてはダメですが）。

海外でのポスドクについて

私は大学院を卒業しポスドク先を探す際、国内でポスドクをすることは全く考えていませんでした。理由は特に明確だったわけではなく、武者修行のノリでした。いやあ、若かった！

海外でポスドクをするメリットは、(1) アウェイの環境で仕事をする一種の人生修行、(2) 異文化を経験できること、(3) 日本を外からの視点で見ることができる、(4) 海外の研究者との繋がりができる、といったところでしょうか。逆にデメリットは、(1) 日本国内との繋がりを維持することが難しい、(2) 国内学会等への参加が難しく日本での就職活動が困難、(3) 日本人の嫁探しができない！（笑）という感じになります。つまり、短期的にはメリットよりもむしろデメリットが目立つということです。

近年、一般に「若者の内向き志向」ということが取り沙汰されています。ストラスブールでも、私の身の回りの日本人研究者の数は、以前より少なくなっています。これを批判するのは簡単ですが、私はそれは無理もないような気がしています。近年は、日本以上に世界中の経済等が混乱しており、特にヨーロッパは大変です。ただでさえ就職やポストの確保が困難な中、上記のようなリスクもあり、こんな状況では外に出たくない考える人が増えても、特に不思議ではありません。

とは言うものの、「長い人生」というスパンで考えた場合、海外経験は得難く貴重なものだとは思いますが。私も全く後悔はしていません。しかし、両手を挙げて勧められるものではないというのも事実です。それなりのリスクがあるということは絶対に知っておくべきで、あまり軽いノリで海外を選ばないほうがいいでしょう。いい結果が出た場合は素晴らしいですが、それは努力したら必ず出るというわけではなく、大いに運も絡みます。私自身のことも含めて、身の回りでも苦勞している人はたくさんいます。無論、若いときでないとそういうギャンブルはできないのも事実なので、それでも行く！という人はぜひ頑張ってください。

あと、海外でのポスドクというとアメリカに行く人が多いですが、ヨーロッパも選択肢の一つとしては面白いと思います。「欧米」と一括りにされることが多いですが、こちらの人はアメリカとは一線を引いて付き合っている印象で、異なるところも多々あります。

ヨーロッパのほうがアメリカより圧倒的に歴史は古いので、そういうものを感じたい人であれば、ヨーロッパはオススメです。どちらが好きかは人それぞれでしょうが、個人的には私はこちらのほうが好きですね。

日本人研究者について

どこかのウェブサイトで、「海外に比べて日本の博士はレベルが低い」などと書かれていたことがあります。こういうことを言う人に限って案外外のことは知らないものだと思うのですが、私のこちらでの印象では、日本人研究者の能力は決して低くありません。全体の平均値としてはむしろ高い（特に実験能力）と思います。アメリカのケースは知りませんので分かりませんが、少なくともヨーロッパはバラツキが大きい印象です。特に、実験能力に問題があるケースが多いと感じます。日本人は几帳面（悪い言い方をすると神経質）ですが、彼らは元々ルーズなのと、日本のようにシステマティックに実験指導をしないためだと思います。特に学生が、時々信じられないようなミスをしていることがあります。ですので、私は自分で再現を取るまでは、彼らのデータは信用しません。（これはどこでも同じでしょうが。）ただ、優秀な人は非常に優秀です。

フランスの特徴と彼らに学ぶべきこと

こちらにきた当初は私もカルチャーショックの連続で、なかなか疲弊しました。フランスの悪いところ(?)はまずあらゆることが非効率なことです。スーパーのレジではとにかく待たされるので、個人的には買い物時にiPodは必須です。また物事の信頼性も低く、例えばオートクレーブやエレベーターはよく壊れ、かつ修理にもものすごく時間がかかります。エレベーターが1ヶ月、オートクレーブが2ヶ月以上壊れたままということがありました。夏のバカンスシーズンになると、あらゆるものが止まります。学内のカフェテリアが閉まり、周りの店も軒並み閉まるため、食事をするのも大変です。あと、私が未だに慣れないのは、公衆の面前で男女が濃厚なキスをすることですね(笑)。例えばスーパーのレジ待ち中に目の前でやられた日には、日本人としては目のやり場に非常に困ります。最後に大事なことですが、フランスのポストは給料が安いので、同僚によるとそれはポス



一緒に仕事をしているラボの同僚と。右端が筆者。スペインのバルセロナにて。



バーにて。クレイジーな同僚たち…。

ドクだけではないようで、助教クラスのポジションの給料も大差ないそうです。上でヨーロッパはオススメと書きましたが、フランスはやめたほうがいいかもしれません(笑)。

逆にいいところは、非効率の裏返しですが、のんびりしていて生活に余裕があることでしょうか。日本は逆に何でもカリカリしていて、物事をギリギリで回している印象を受けます。そしてもう1つは、自国語に高いプライドを持っていることです。このことは比較的ネガティブな文脈で言われることが多いですが、私はこの「自国語を大事にする」態度は、フランス人に学ぶべき非常に重要なことの1つだと思います。フランス人同士が英語で会話することはまず考えられませんし、私たち外国人がその場においても彼らの会話は基本的にフランス語です。それに対して日本人は、コンプレックスでもあるのか、簡単に相手に合わせてしまって、自国語を大事にしない傾向が強いと思います。こちらが英語で話しかけてもフランス語で返ってきたり、ひどい場合には無視をするというのはいささかやりすぎだと思いますが、彼らのメンタリティには学ぶべきところがあると感じています。上に書いた研究者の能力の話もそうですが、もう少し日本人は自信を持ったほうがいいのでは、というのが私の意見です。

近年の国際化および英語化志向について

近年、日本では「国際化」という言葉が頻用され、「英語化」に向かう流れがあるように感じられます。いくつかの企業で英語が公用語化されたという話も聞きました。小学校高学年に英語が導入され、最近では、それを低学年にも広げることが検討されているようです。結論を先に書きますと、私はこうした動きには反対です。

アカデミアの世界でも近年、国内学会の英語化が進んでいるようです。私の個人的意見では、英語で発表する練習をしたければ、国際学会へ行くべきです。国内学会の役割は別のはずですし、日本人同士が下手な英語で会話したところで、特に英語が上達するとも思えません。それどころか、学会の本来の目的である研究内容の議論が非常にプアーになる恐れがあります。

英語を極めて流暢に操るためには頭の中の思考を英語化せよ、というのはよく言われることですが、私は未だにそれができていませんし、それほど簡単であるようにも思えません。人間は母国語で思考するものですが、それを無理に英語に置き換えると、むしろ思考のレベルを下げることに繋がるのではないかと私は大変危惧しています。

無論、英語が下手でよいという話ではなく、上手いに越したことはありません。私もまだまだ下手クソであり、修行中の身です。しかし、言葉はあくまで道具に過ぎない以上、そこは本質ではない、私の言いたいことはそういうことです。

以上、とりとめのない駄文に付き合ってくださいまして、ありがとうございました。あちこち異論が出るかもしれませんが、せっかくこのような寄稿の場を与えていただきましたので、あえて私個人の意見として書かせていただきました。皆さんの議論のきっかけにでもなれば、これに勝る喜びはありません。